

人生を通じて共に学び、リベラルな関係を育む「50歳からの大学」

立教セカンドステージ大学 <https://rssc.rikkyo.ac.jp/>

統括特命教員 栗田和明さん
特命教員 渡辺信二さん

これからの生き方を考え直す 人生100年時代の学び舎

つた
鳥が生い茂るれんが造りの時計台や校舎に、チャペル。イギリスの大学を思わせる美しいキャンパスを歩くのは、若い学部生ばかりではありません。ここは、東京・池袋の立教大学。その一角に集まる中高年のグループは、「立教セカンドステージ大学(以下RSSC)」の受講生です。

RSSC は50歳以上を対象に、「学び直し」「再チャレンジ」「異世代共学」を目的として2008年4月に創設された学びの場。リベラルアーツ^{*}を教育理念に掲げる立教大学として、どう社会貢献できるのかというところから発足しました。「リスクリソクではなく、人生を考え直す機会を提供したいと考えた」と、立教大学名誉教授でRSSC特命教員の渡辺信二さんは話します。「人生を振り返り、自分が何者かを考え、どう生きるのかという人文学的な疑問を解いていく。人生100年時代に、50歳まで生きた方が、後の50年をどう生きる

のか考える“モラトリアム”の時間を提供しようということです」

本科の1年間で自らの生き方を見つめるためのカリキュラムも、充実しています。「エイジング社会の教養」「コミュニティデザインとビジネス」「セカンドステージ設計」といった科目群の中から、授業を選択。受講して終わりではなく、在学期間中に所定の単位を修得して修了証書を手にするという、大学のようなスタイルです。それは、歴史や宗教、世界経済などを基礎から学んで視野を広げたいという人たちや、大学進学率が現在ほど高くなかった世代の、改めて大学で学びたいというニーズに応えるためでもあります。

ともに学び、議論をして、 異世代と理解を深め合う

RSSCが一般的な市民大学と大きく異なるのは、受講生全員がゼミナールに所属し、修了論文を完成させなければならない点です。「文は人なりと言うように、書くこ

とが人間を育て、鍛えていきます。書くことによって新たな自分を発見し、それを発表してゼミの中で議論するとさらに新しい自分が育つ。そういった経緯を経て修了論文をまとめ上げることには、大きな意味があります」と渡辺さん。論文のテーマは、各自が関心に沿って自由に定め、ゼミごとに方向性がまとまっているわけではありません。例えば、宮沢賢治から二酸化炭素の規制、鹿島神宮の「鹿」の字の由来など、1つのゼミ内でもテーマは実にさまざま。担当する教員は論文の基本的な書き方を教えつつ、専門外のテーマは一緒に学びながら執筆をサポートします。「修了後に、辛かったとか途中で止めようと思ったとか言う受講生の方もいらっしゃいますが、みなさんすごく楽しそうにそう話すんです」

そして、もう一つの大きな特徴が「異世代共学」。学部生のための全学共通科目を、RSSC受講生が選択できる仕組みがあり、若い世代と共に学ぶことができます。直接交流できる授業もあり、異文化コミュニケーション学部の授業では、学部



1



2



3

※ 一般的に「教養」と訳されるが、立教大学では「専門性に立つ教養人」の育成を掲げ、学問分野の枠組みにとらわれず、横断的に学べるリベラルアーツ教育を実施している



4

生の発表をRSSCの受講生が聞き、社会経験を踏まえた意見を提示して議論を深めます。また、経営学を学ぶ大学院留学生の授業では、ビジネスの世界で活躍してきたRSSCの受講生が、上司や取引先としてロールプレイの相手役となり、実践的なやり取りを学ぶ手助けをしています。

若い学部生からは、RSSCの受講生が自分たちを若輩者扱いせず、友達のような目線で接してくれるのがうれしいという声が聞かれると言います。「受講生たちは偉ぶったりすることなく若い人の話をよく聞いていて、教員から見ても良い関係が築けていると思います」と話すのは、RSSC統括特命教員の栗田和明さん。「学部生との間だけでなく、RSSCの受講生の中でも50～80代の世代差があります。授業でディスカッションすると、世代の違いによってさまざまな発見があるようです」

自主性が織りなす学びと親交 活動への積極参加は修了後も

RSSCの学びの場は教室の中だけではありません。香川県小豆島の醤油づくりや静岡県しやうゆの里山の営み、埼玉県での自然農法など、キャンパスの外へ出て体験しながら地域で学ぶ、フィールドスタディを取り入れています。また、合宿もあり、講演やグループディスカッションのほか、星や野鳥の観察会、キャンプファイヤーなどが行われます。所属するゼミを超えて、受講生の親交が深まる機会になっているといいます。

こうした在学期間中に実施されるさまざまな行事の企画・運営を行うのは、各ゼミから選出された受講生で構成する委

員会です。「この委員会はいわば自治活動。単位はもらえませんが、みなさん自主的に立候補して活動に参加し、運営の現場でも積極的に意見を出し合います」と渡辺さん。授業の場に限らずキャンパスライフを楽しめる仕組みが整っていて、それが受講生の学校への帰属意識や愛着を高めているようです。

さらに、RSSCでは修了後の活動や交流も盛んです。修了生の8～9割が加入するという同窓会には、英会話や心理学、ワインや合唱などのテーマで自主的に活動する研究会や同好会が11あり、活発に活動しています。「同窓会は修了生によって自然発生的に生まれた組織ですが、大学としても加入案内や加入受け付けに協力しています」と栗田さん。

一方、同窓会とは別の「社会貢献活動サポートセンター」というRSSCの組織もあります。9つの研究会が登録されているこちらは、在校生や修了生が社会貢献を目的としたグループ活動を行うために設立されたもの。経済や社会問題、ビジネスや地域活動がテーマの研究会が目立ちます。栗田さんは「在校生と研究会をつなぐ役割を担っており、修了後も学び続けたい、地域に関わり、何らかの形で活動したいという思いに応えています」と話します。

修了後の進路を見ると、本科の次のステップとして設けられている専攻科に進む人が約半数。大学院を含めた他の教育機

関に進む人が3割ほどです。同好会や研究会以外でも、授業を通じて自分が住む地域への関心が高まり、NPOやNGOなどの活動に参加する人が多くいます。

興味深いのは修了生たちの名言の数々。RSSCについて「修了してからが面白い」「まさに奇跡の場所」「“セカンドステージロス”になる」といった声があがっていると栗田さん。「50歳を過ぎて、利害関係なく付き合えるのは奇跡のようなことだからこそロスもあり、修了後の活動も非常に盛んで充実していると言えます」。渡辺さんも「年齢や性別関係なく、平等にリスペクトし合える、リベラルアーツの基本となるような関係性が築けているということだと思います」と口をそろえます。学ぶことの魅力を再発見し、学び合うことで生まれた新たな人間関係が、その後の人生を豊かにしている。そんな修了生たちの様子が見え隠れします。

1. 『シニアのための経営学』という授業の、パズルを使ったグループワークでは、同じ作業を繰り返すときの経験効果を回帰分析で求める統計実習を行った
2. 毎年チャペルで行われる入学式。修了式もここで行われ、荘厳な雰囲気感動する受講生も多いという
3. 修了論文発表会も委員会が取りしきる。他には広報誌を作成したり、クリスマスや納涼パーティーを運営するなどの委員会活動がある
4. 1919年の落成以来、教室として使われている本館は、立教大学のシンボル